

定期総会出欠連絡を返送いただいていない皆様につきまして、本議案をご一読され、<http://www.neatr-org.jp/> に設定する返信メールより、それぞれの議案について賛否投票をいただきたく存じます。

# 地域住民のための原子力緊急時援助隊 ( NEATR )

## 第4回定期総会 議案書



日時 : 2020年3月28日(土) 16時30分～17時30分

場所 : 敦賀市白銀町11-5 アルプラザ敦賀店

3階カルチャールーム

## 議事次第

1. 司会者 定数確認、開会宣言
2. 議長選出
3. NEATR隊長あいさつ
4. 経過報告  
～質疑応答～
5. 審議事項  
活動方針1 緊急時コミュニケーションの展開について  
活動方針2 共通用語の使用(ターミノロジー)について  
活動方針3 NEATRコマンドシステムの改善について  
～質疑応答～  
～採決～
6. 決意表明
7. 閉会
8. 記念撮影

### 決意表明

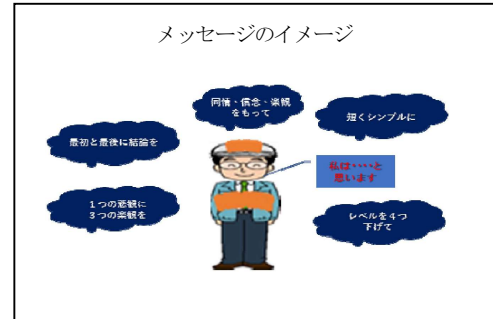
私たちにはできることがある  
私たちにはしなければならぬことがある  
Support With Heart NEATR !

注 NEATR 規約は [URL:http://www.neatr-org.jp/](http://www.neatr-org.jp/) にあります。

## 活動方針1 緊急時コミュニケーションの展開について

### 【2020年度の取り組み】

- (1) ステークホルダーと一緒にやって行う活動は、すべて「緊急時コミュニケーション」と位置付ける。
- (2) 緊急時コミュニケーションは、ステークホルダーへ伝えるべきメッセージを明確にして行う。
- (3) 緊急時コミュニケーションの実施に当たっては、ステークホルダーの意見等を傾聴する態度を優先する。



### 【説明】

NEATRは、「原子力緊急時において原子力事業所周辺の住民の混乱を回避する活動、および平常時において地域レジリエンスの向上に資する活動を実施する」ために、2016年12月、志ある原子力職場OB、OGにより創設した。

創設以来、この目的を達成するため、周辺地域住民の方々や原子力関係の学生諸子と交え、放射線実習というワークショップ形式の交流活動を実施してきた。

こういった交流活動が、果たしてNEATRの目的に合致するものか、参加していただいた諸氏に安心材料を提供することにつながったのかといった、活動そのものに対する一種の躊躇が生じてきた。そして、組織維持の観点から、この問題に対応する必要性が生じてきた。

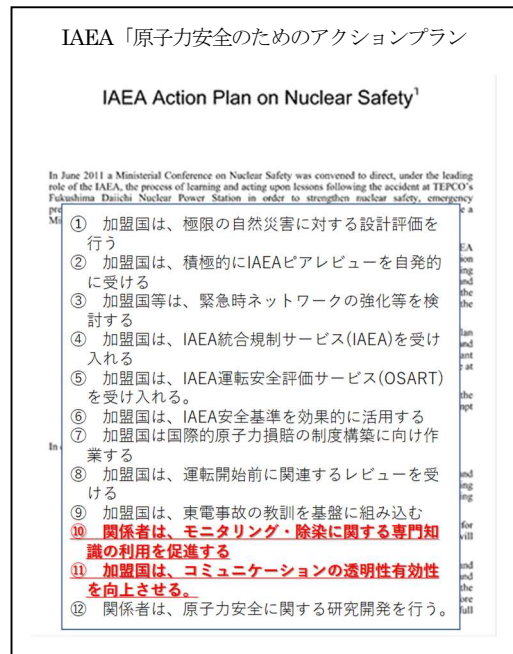
そのために、特定非営利法人ワネッツの定款目的に「リスクコミュニケーション」を入れ、2019年9月 日、福井県知事の認証を受けた

2011年9月、国際原子力機関(IAEA)は、同年に発生した東電福島事故を受けて、12の領域からなる「原子力安全のためのアクションプラン」を発表した。また、このアクションプランを確実にするために、翌年12月、117の国と13の国際機関が参加した「原子力安全に関する福島国際会議」が、福島県郡山市で開催された。

12領域のアクションプランの10項目に、「加盟国、IAEA事務局その他関係者等は、モニタリングや除染に関して専門知識や技術等の利用を促進する。」と記され、11項目に「加盟国は規制機関等の間におけるコミュニケーションの透明性及び有効性を向上させる。」と記された。

また、福島国際会議の専門家会合3では、放射線防護・除染・健康影響等に関し、リスクコミュニケーションの重要性が強調された。

この2つの提言等は、放射線リスクに関するコミュニケーションが充分でなかったという福島住民避難の事実を示すものであり、同時にこの事実を教訓として生かすことが、関係者に求められているといえる。そしてこの教訓を生かすために、NEATRの目的は設定しているもだといえる。



NEATRでは、この放射線リスクに関するコミュニケーションを「緊急時コミュニケーション」と呼ぶことにした。その定義は以下のとおりである。

#### 緊急時コミュニケーションの定義

「原子力緊急時に関するメッセージを伝え、思慮深く判断し建設的な意見を述べる人を増やす活動」

また、このメッセージを伝える相手を、「ステークホルダー」と称することとした。このステークホルダーは、原子力緊急時において地域住民のための活動をしていただきたい方々のことであり、緊急時に備え日頃から顔の見える関係を構築しておきたい方々をいう。

この緊急時コミュニケーションは、ステークホルダーにNEATRを信頼してもらうことにも多いに役立つものである。このことは、地域レジリエンスの向上にも、当然のごとく資するものである。

#### ステークホルダーに伝えるべきメッセージの例

- ✓ 放射線防護は、人体の各組織に吸収される放射線量に着目し、放射線利用は、主に人体や物体を透過する放射線量に着目する。
- ✓ 実効線量は、決して人体への影響を表す被ばく量(被ばく線量)ではない。実効線量は、防護措置とともに計算して求める必要がある。
- ✓ 実効線量の事前予測(アセスメント)により、論理的に身を守ることができるようになることが望まれる。
- ✓ 人体の各組織が吸収する放射線の線量は、病気になったときに服用するお薬の効き目のようなものである。

## 活動方針2 共通用語の使用(ターミノロジー)について

### 【2020年度の取り組み】

- (1) 緊急時コミュニケーションに必要な放射線用語を抽出し、IAEAの用語集を参照して「緊急時コミュニケーション用語集」を作成する。
- (2) この用語集の作成に当たっては、文字での説明だけでなく、イラスト図など、理解しやすい表現を補足する。
- (3) また、作成の断面で、NEATR隊員と十分な意思疎通をはかる。

### 【説明】

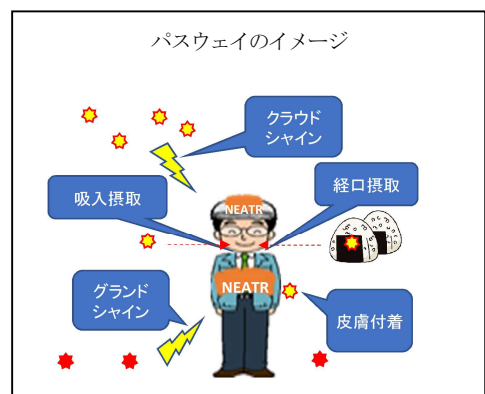
2019年度の活動方針で、「共通用語の使用(ターミノロジー)について」を掲げ、用語仮説集を作成するとしたが、2020年1月の第4回NPO法人ワネッツ役員会兼NEATR戦略本部会議で、トーマス・ジェファーソン研究所の小中学校先生へのレクチャーQ&Aをベースに、原子力の基礎的用語の解説書を行うこととした。

国際原子力機関(IAEA)では、緊急時のリスクコミュニケーションを加盟国に浸透させるためのガイドラインを作成しそれを普及するための教材も作成しているが、この教材において東電福島事故では様々な組織がいろんな用語を用いて違う説明をしたため、これを聞いた福島の住民の方々は混乱したという事実を述べ、「ワンボイス」(いつでもどこでも同じ話が聞ける)ができていなかったことが教訓だと述べていた。また、ミリやマイクロという単位の接頭語が統一性なく用いられたため、その伝えたい量の程度が伝わらなかったという事実も指摘していた。

現在、国内では職業人の放射線管理については法令で規定されているが、公衆の放射線防護については法令で規定されていない状況にある。また、国際放射線防護委員会(ICRP)の勧告を全面的に受け入れたIAEAの安全基準、これはIAEA加盟各国が履行すべき基準であるが、は被ばく状況や数値において職業人と公衆を区分している。例えば、数値においては、IAEA安全基準の職業人の計画被ばく状況における線量限度は、年の実効線量で20ミリシーベルトであるが、公衆のそれは1ミリシーベルトであるというように。

このため、数値だけでなく防護概念も異なる職業人の基準を公衆に当てはめることはできず、このことは、NEATRの緊急時と平時の両方の活動において、ワンボイスの原則に合致しない可能性が出てくる。

これを回避するため、NEATRの用いる公衆向け



の放射線に関する用語を統一（ターミノロジー）する必要がある、それは、現在の国内法令の枠外であるため、NEATRとして新たに作成する必要がある。

この作成に当たっては、国内でもいずれ導入されるであろう、IAEAの関係基準を先行的に反映する必要がある、そのIAEAの基準としては、IAEA安全用語解説2016年版がある。この基準から先行的に反映した用語としては、「放射線リスク」、「パスウェイ」や「実効線量」がある。

この取り組みは、現在、原子力規制委員会の放射線審議会で審議されている、ICRPの最新の総括的勧告である2007年勧告(Pub. 103)、これは、IAEAの安全基準(GSR Part 3、基本安全基準)と等価であるが、の導入を見極める必要がある。

この共通用語の使用(ターミノロジー)に関する活動は、NEATRの目的を達成するためとはいえ、容易ではないことは事実である。例えば、「被ばくの影響」でなく「放射線リスク」という用語を使う活動を展開しているが、そもそも「リスク」とは何かの共通的な認識はできていないし、「パスウェイ」についても、この用語がなぜ必要かについてほとんど合意ができていない状況にある。

しかしながら、こういった困難な状況にも、挑戦し続けること、それがNEATRの本分でもある。

#### 緊急時コミュニケーション用語集の例

[放射線リスク]

デトリメントが発生するか、発生する可能性。

[デトリメント]

放射線の確定的影響や確率的影響により社会的な混乱が起きること

[実効線量]

放射線の確率的影響に関する防護のための線量。吸収線量に放射線荷重係数と組織加重係数をかけた線量。

## 活動方針3 NEATRコマンドシステムの改善について

### 【2020年度の取り組み】

- (1) 緊急時のコマンドシステムICSフォームをNEATR戦略本部からライブ説明するため、NEATRコマンドシステムにライブ映像システムを組み込み、平時において、ドリル、隊員総会、研修会等でも活用する。
- (2) 録画再生も可能とし、NEATRの動画知識データベースとする
- (3) NEATR規約等、必要な規定類を改正する。

### 【説明】

NEATRの構成員の範囲が近畿圏、北陸圏と広く、活動に関して人集めに困難をきたしていたため、自宅等で対応できる会議等はライブ配信を用いて行うことを目指した。

2019年3月にライブでのワークショップおよびNEATR定期総会を実施し、同月には現場中継のライブ研修会を実施した。また2019年8月には、コマンドシステム演習関係の準備打合せ兼役員会、同演習での先行情報発信等を行った。これらについては、視聴率(視聴数/対象数)が高く、内容を工夫することにより参加と見なせる状況が予見された。

以下は4回実施したライブ配信の視聴者数(接続延べ回数)である。



2019年8月コマンドシステム演習風景

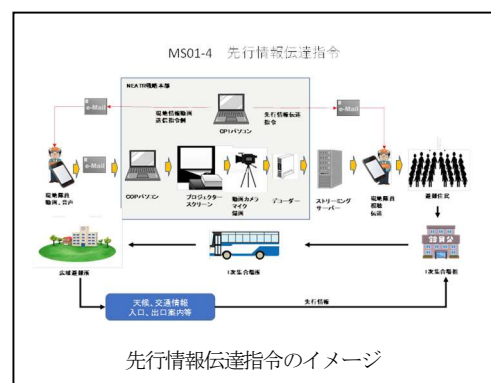
ワークショップ及びNEATR定期総会	現場中継研修会	コマンドシステム演習説明会	コマンドシステム演習
2019年3月9日	2019年3月28日～3月30日	2019年8月27日～8月29日	2019年8月31日
80人・回	53人・回	72人・回	20人・回

このため、NPOワネッツの定款の変更申請を行い、2019年9月2日に福井県知事の認証を受け、以降、総会および理事会においても電子媒体による決議ができるようにした。なお、第3回NPO法人役員会は、この状況を試行適用し、メールではなくライブ配信により実施した。

また、2018年8月31日のコマンドシステム演習では、福井県原子力防災訓練の1次集合場所に隊員を派遣し、住民が避難する広域避難所等の天候等の情報を「先行情報伝達指令」というミッションを設定した。

具体的な方法は、暫定的なライブ配信システムを構築し、広域避難所等の情報をライブ動画で戦略本部が受け、その動画と隊長の指令を組み合わせ、1次集合場所の隊員へライブ映像と指令という形で伝えた。

これら試行の結果、ライブ指令を実運用に移すことに支障がないと判断した。よって、NEATRコマンドシステムにライブ指令方式を導入することとした。

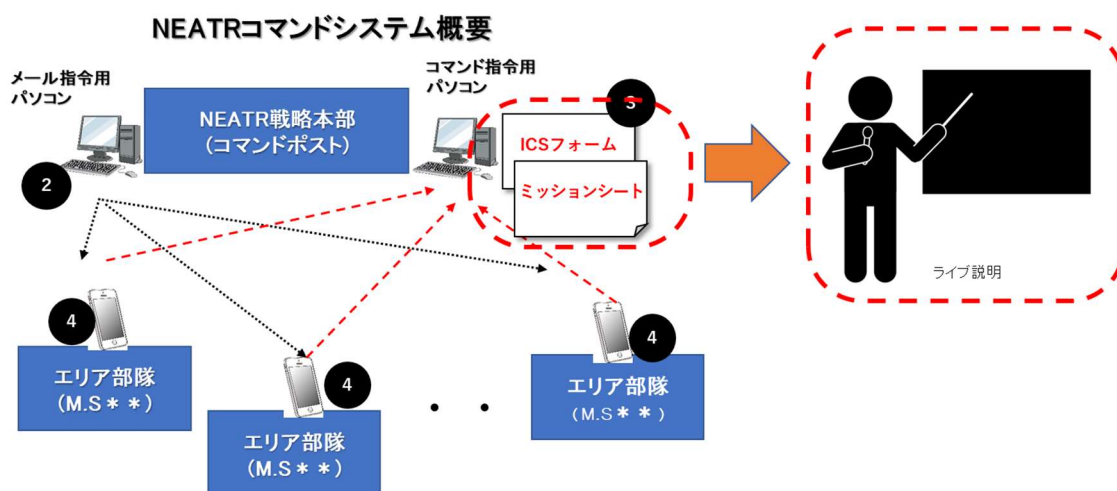
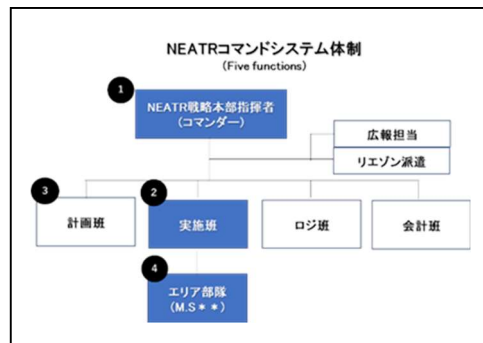


具体的には、現在、ICS フォーマットおよびミッションシートを都度作成して NEATR 専用ページに掲載するとしているものを、集まった情報をもとに戦略本部がライブで説明し、隊員はスマホからライブを視聴することで、目的や実施内容を確認できるようにする。

このシステムは、原子力緊急時だけでなく、在宅での総会や研修会等への参加も可能とする。

なお、平時のライブ配信を録画し、研修ビデオライブラリーとして保存する。

また、本年度中に試行を行い、その結果を評価して、システムの更なる改善および NEATR 規約等の改正を行う。



以上



(参考)

第3回 NEATR 定期総会で議決された活動方針の実施状況

2019 年度活動方針	2019 年度実施状況
<p>・緊急時コミュニケーションの展開について</p> <p>(1) ステークホルダーとの活動は「緊急時コミュニケーション」と位置付けて活動する</p> <p>(2) 伝えるべきメッセージを明確にして行う。</p> <p>(3) ステークホルダーの意見等を傾聴する態度を優先する</p>	<p>北陸4県防災士会研修や若狭湾エネ研受託研修において、緊急時コミュニケーションの定義に基づき、「線源、パスウェイ、線量」といったように伝えるべきメッセージを明確にして、クイズ方式や質問、意見を求める方式で実施した。</p>
<p>・共通用語の使用(ターミノロジー)について</p> <p>(1) 「緊急時コミュニケーション用語集」を作成する。</p> <p>(2) イラスト図など、理解しやすい表現を補足する。</p> <p>(3) 作成の断面で、NEATR 隊員と十分な意思疎通をはかる。</p>	<p>第4回 NEATR 指令本部会議で、2019 年度用語集については、米国トーマス・ジェファーソン研究所の小中学校先生用の Q&amp;A をベースに作成することとした</p>
<p>・NEATR 機関誌ウィズハートの継続的改善について</p> <p>(1) 機関紙アンケート結果を分析し、読まれる工夫としてトライアルできそうな項目を抽出する。</p> <p>(2) グラ版を作成し、人数を絞った隊員の方々に、レビュー依頼を行う。</p> <p>(3) 事務局および隊員どうしのツエウイコミュニケーションとなるよう、特に留意する。</p>	<p>機関紙ウィズハート第 12 号において、読者アンケートを実施した。なお、評価は 2020 年度に行う。</p>